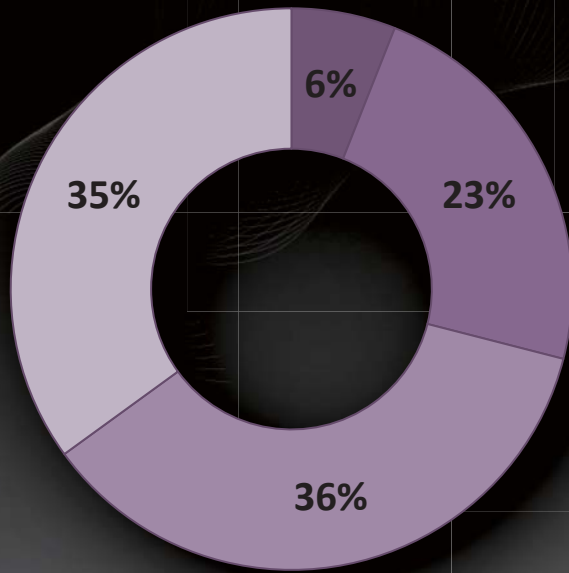


窓口での聞き取り調査

ふたば薬局 藤田店 N=100

Q.1薬の数が合わない、足りなくなるような経験はありますか？

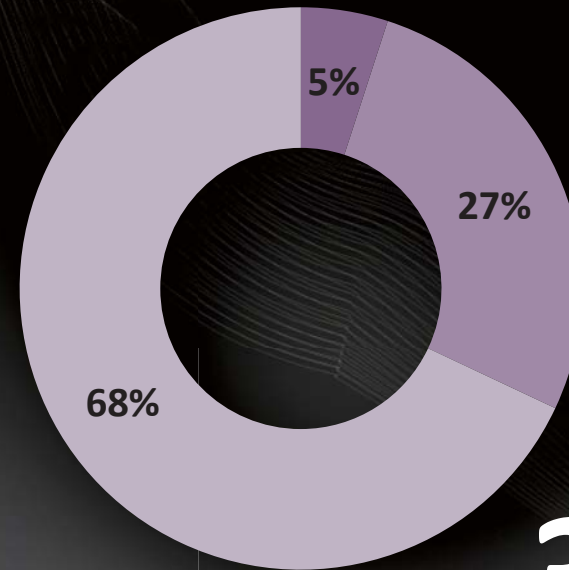
■よくある ■たまにある ■あまりない ■全くない



29%

Q.2自宅での薬の保管や管理に関して不安や疑問に思うことがありますか？

■よくある ■たまにある ■あまりない ■全くない



32%

薬の数が合わない、足りなくなるような経験あり

薬剤管理に不安を抱えている状況

通院患者へのフォローは、来局時の対応のみで十分か？

Background

近年、超高齢化社会の我が国において在宅医療へのニーズが高まる中、地域包括ケアシステムの実現に向けて、多職種協働による在宅業務への参画が求められている。一方、在宅患者とは対照的に通院患者へのフォローは、来局時の対応のみで十分とは言えないのが現状である。さらに、日本薬剤師会の報告によれば、来局している高齢患者のうち、飲み忘れ等の可能性がありながら、在宅患者訪問薬剤管理指導等を実施していない患者の割合は、10%前後存在すると言われている。そこで、ふたば薬局笹谷店（以下；当薬局）に来局している高齢患者に対して、自宅における薬剤管理状況を訪問調査し、問題点を抽出した。



- 通院患者の薬剤管理状況の実態の把握
- 薬剤管理状況から飲み忘れに関与する要因の分析
- 薬剤師訪問による介入効果の評価

Methods

当薬局を継続的に利用している患者を無作為に抽出した後、患者宅へ訪問し、薬剤管理に関する実態と問題点を調査した。
尚、本調査は、倫理的配慮に基づき、対象患者に対して本研究の趣旨を事前に伝え、同意を得たうえで行った。

【調査施設】ふたば薬局 笹谷店
福島県福島市笹谷字中田4-17



【調査期間】 H24.5～H24.7

【症例数】 47例

<Patient data>

| | |
|---------|---------------|
| 平均年齢 | 82.9±5.7歳 |
| 性別 | 男性：16例 女性：31例 |
| 平均処方日数 | 21.06日 |
| 平均服用薬剤数 | 6.8±4.4種類 |
| 平均受診率* | 97.3% |

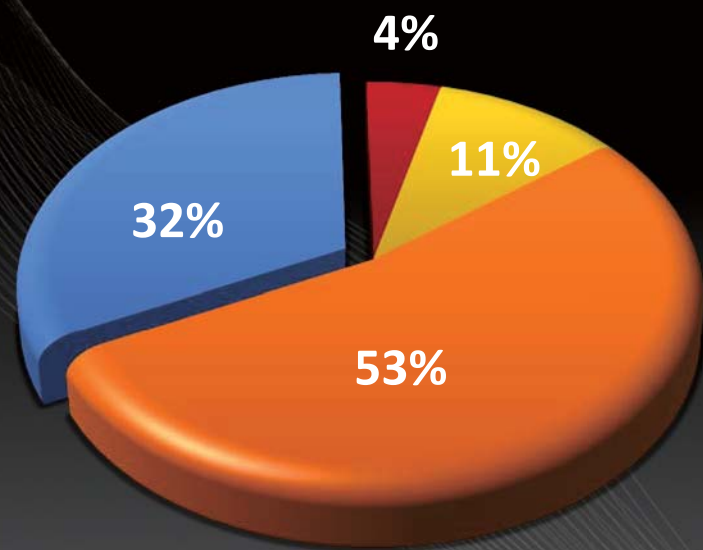


薬剤管理方法 ➡ 32% ピルケース等で管理

< Sample photo >



自宅での薬剤管理方法 (47例)



■ 薬袋 ■ ピルケース等 ■ カレンダー ■ その他

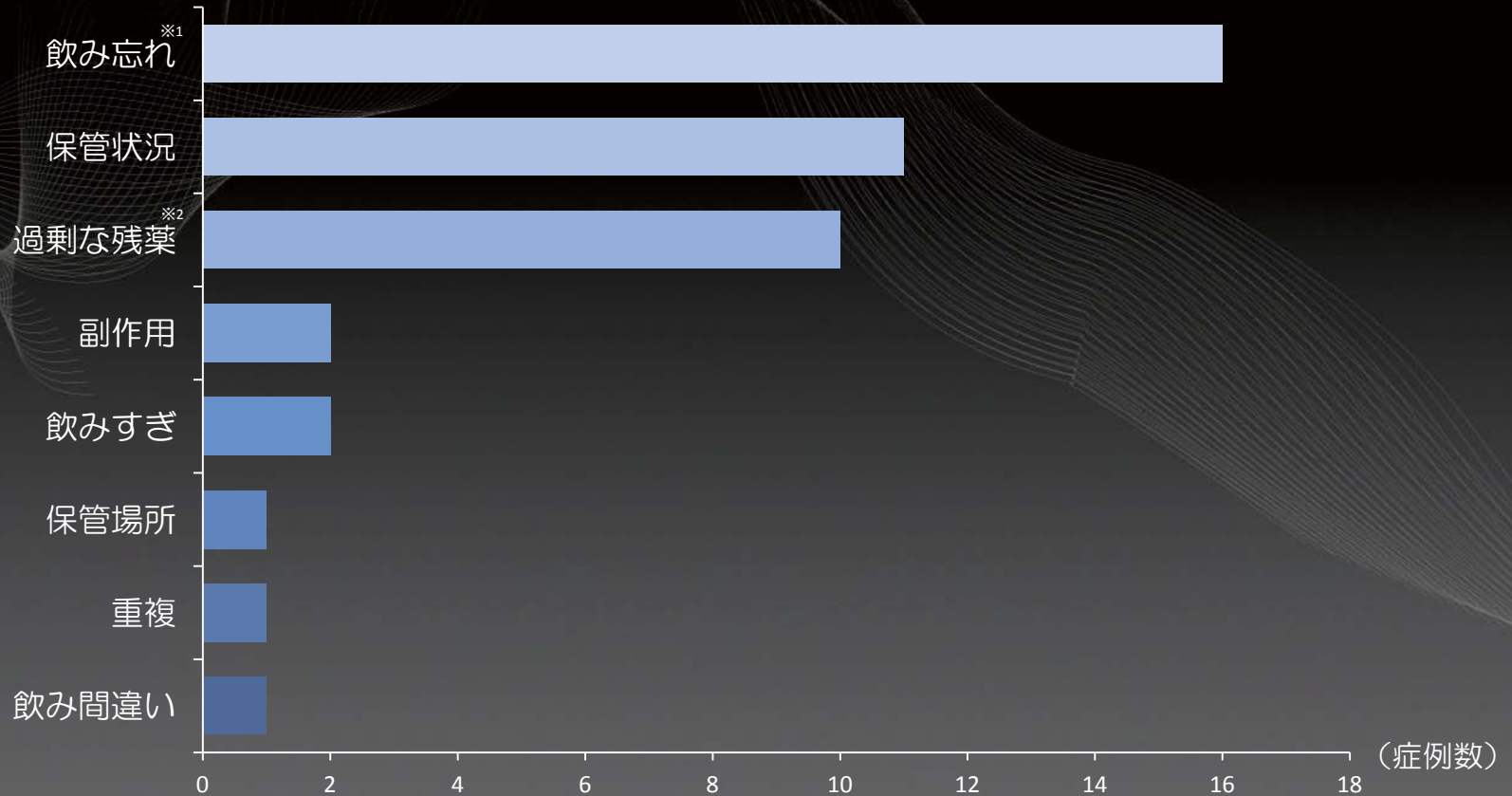
85.1%の患者が自己管理

訪問時確認された問題点

訪問時、何らかの問題点が確認された患者の割合

38.3% (N=18)

(複数回答可)



※1 「飲み忘れ」を客観的に判断するため、訪問確認時、錠剤の数が種類によってバラバラの場合、飲み忘れによるものとし、「飲み忘れ」と判断した。

※2 過剰な残薬：処方1回分に相当する量

薬剤管理方法と飲み忘れの関係

薬剤管理方法（薬袋;53%,ピルケース;32%,カレンダー;4%,その他;11%）が飲み忘れと関連性があるかをFisher's exact testにより検定した。

Fisher's exact test (Extended) $P > 0.05$ ($P = 0.56$)

薬剤管理方法と飲み忘れに直接的な関連性はない結果となった。



薬剤管理方法のみでComplianceを評価できないと考えられる。

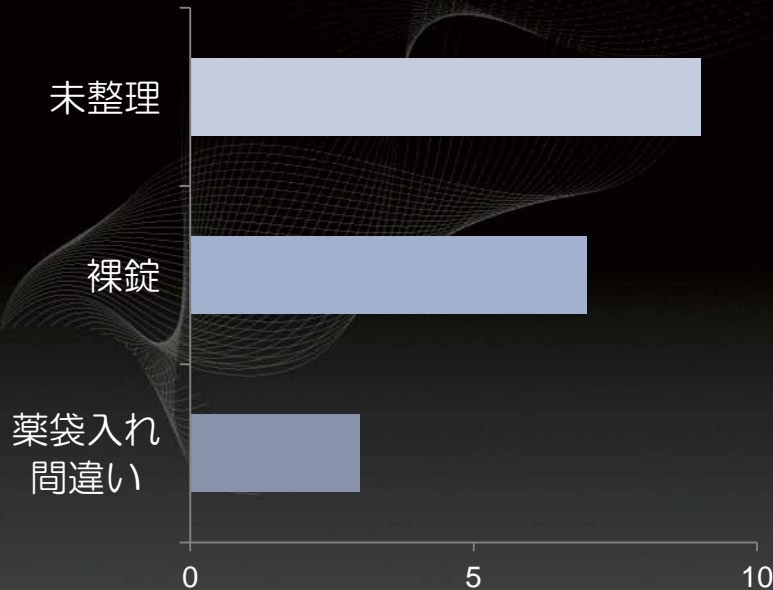


訪問時に確認された薬剤管理状況における問題点から、どのような要因が飲み忘れに関与するかを分析した。

保管状況の問題と飲み忘れの関係

保管状況に問題があった患者数・・・11例

(複数回答可)



<未整理；内訳>

- ・薬の保管場所が不定（散乱）
- ・PTPが中途半端な状態で保管
- ・不要な薬袋が多数存在
- ・過去の薬が保管 etc...

保管状況に問題があった患者と飲み忘れにおける関連性をFisher's exact testで検定した。



両側P値・片側P値 **0.00003**

Cramer V:0.6297

保管状況に問題がある場合、飲み忘れに有意に影響を与えた。(P<0.001)

訪問時、不要な薬袋や不適切に管理されていた薬を整理し、管理方法等を患者と共に再確認した。



保管状況の改善によりComplianceの向上が期待できる。

受診率と残薬の関係

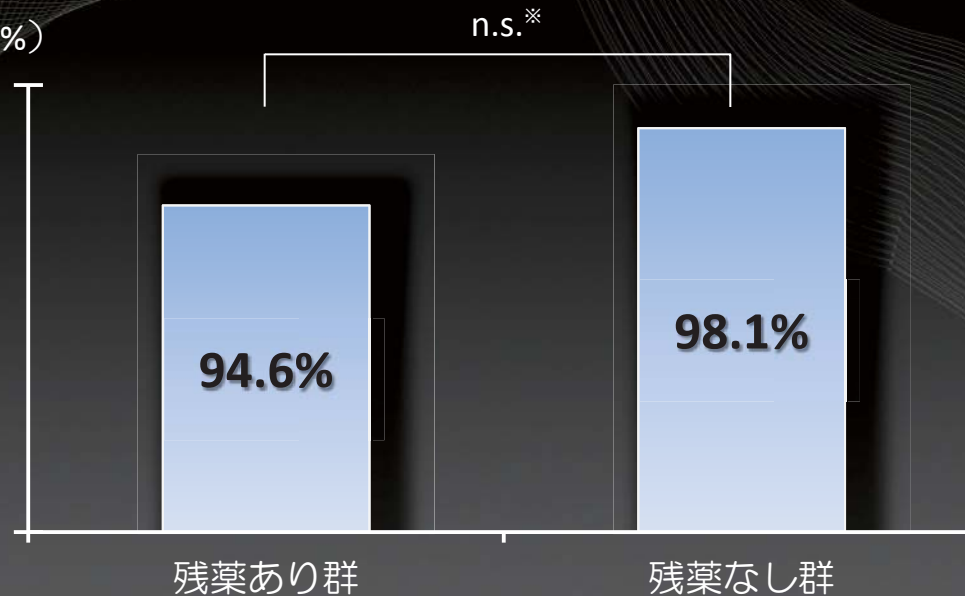
平均受診率 **97.3%**

受診率と訪問時に確認された過剰な残薬（処方1回分に相当する量）との関連性を Welch's t-testにより検定した。

残薬あり群（N=10）：94.6% vs 残薬なし群（N=37）：98.1%

※2群の等分散性の検定 ⇒ $F(9,36) = 2.91, p > 0.05$

平均受診率 (%)



※n.s.; not significant

受診率と訪問時に確認された過剰な残薬には関連性がなかった。（ $p=0.31$ ）



受診率が高いからといって過剰な残薬がないわけではない

PTP包装における服薬管理状況の実態 ①

調剤方法 PTP (N=36)

PTP包装をランダムに服用する患者

19.4% (N=7)

PTP包装をランダムに服用する患者と飲み忘れにおける関連性をFisher's exact testで検定した。



両側P値・片側P値 0.0003

Cramer V:0.5557



PTPをランダムに服用する場合、有意に飲み忘れを起こしやすくする。(P<0.001)

PTP包装における服薬管理状況の実態 ②

調剤方法 PTP (N=36)

PTP包装を事前にカットする患者

16.7% (N=6)

PTP包装を事前にカットする患者と飲み忘れにおける関連性をFisher's exact testで検定した。



両側P値・片側P値 0.0191

Cramer V:0.3660

PTPを事前にカットする場合、有意に飲み忘れを起こしやすくする。(P<0.05)

◆類似したPTPをカットすることは誤飲のRisk factor

⇒ 類似した薬剤や種類が多いとき等は要注意

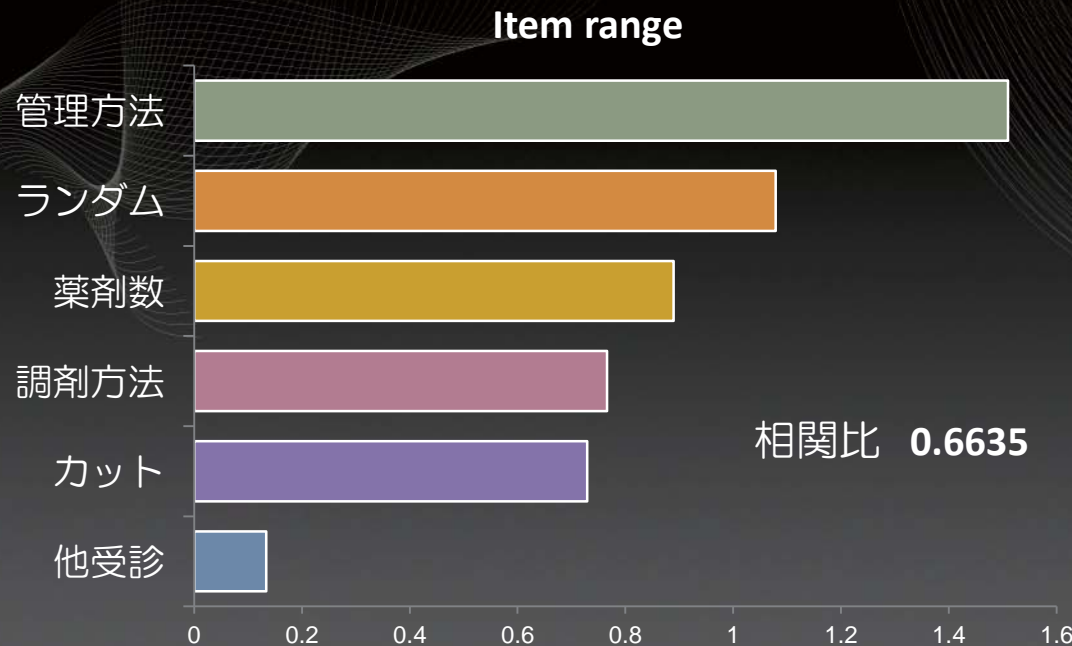
◆種類が少なく、ケースで管理している場合

⇒ 管理状況が良く、Compliance良好

薬剤管理に問題がある患者を窓口で判別するツール

自宅での薬剤管理に問題がある患者を、患者宅に訪問せずに、薬局の窓口において抽出するため、数量化Ⅱ類にて判別を行った。

アイテムは、窓口で聴取可能な「管理方法」「ランダム^{※1}」「カット^{※2}」そして、患者背景として「薬剤数」「調剤方法」「他科受診」とした。



※1;PTP包装をランダムに服用する患者
※2;PTP包装を事前にカットする患者

| Item | Category | Category score |
|------|----------|----------------|
| 管理方法 | カレンダー | 1.0527 |
| | ケース | -0.4569 |
| | その他 | -0.1651 |
| ランダム | 薬袋 | 0.223 |
| | なし | 0.1607 |
| 薬剤数 | あり | -0.9182 |
| | 6種類以下 | 0.4162 |
| 調剤方法 | 6種類以上 | -0.473 |
| | PTP | -0.5865 |
| カット | ODP | 0.1792 |
| | なし | 0.1241 |
| 他科受診 | あり | -0.6048 |
| | なし | 0.0285 |
| | あり | -0.1054 |

Category score ⇒ マイナスの数値が大きいほど薬剤管理に問題を生じやすくする。

Item range ⇒ 大きいほど薬剤管理の問題に影響を与えやすくなる。

条件が重なれば、薬剤管理に問題がある可能性が高い ⇒ 患者宅訪問で指導を検討

薬剤師訪問による改善事例

①

Sample score=-2.379

【背景】

- 85歳 男性
- 服用薬剤数 9種 他科受診あり
- 受診率100%の患者（夫婦で来局）
- 調剤方法 PTP

他科の薬との管理に混乱気味だった。
事前に薬をバラバラにカットし、
ピルケースで薬剤管理をしていた。
同色の薬があり間違っ配薬していた。



薬剤師訪問による介入

他科と合わせて一包化
日数違いのため、残りは薬局で預かり管理



配薬手間軽減・飲み忘れがなくなり患者から感謝された。

薬剤師訪問による改善事例 ② Sample score=-0.971

【背景】

- 84歳 男性
- 服用薬剤数 16種 他科受診あり
- 調剤方法 PTP

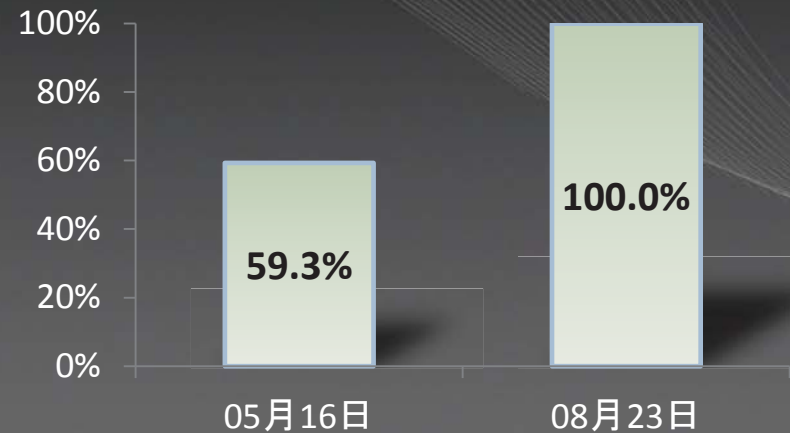
訪問時、過剰な残薬を発見。
1日3回服用する薬、下剤等が特に余っていた。
他科の薬との管理に混乱気味だった。
薬局窓口では、問いかけによる反応が鈍かった。



薬剤師訪問による介入

他科とまとめて一包化
日数違いのため、残りは薬局で預かり管理

訪問前後で受診率に変化あり (H24.5.17訪問)
定期的な受診 ⇒ コンプライアンス改善



Conclusions

定期的に受診している患者であっても、自宅における薬剤管理に問題があった。このうち、保管状況の問題に対する薬剤師の介入は、飲み忘れ防止に繋がる可能性があると考えられる。そこで、来局時の対応のみで不十分な場合は、服薬指導のみで完結させず、状況に応じて、薬を管理している近くまで入り込み、フォローすることが必要であると考えられる。これらの対応は、時間や経済的な効率は必然的に低下するが、通院患者に対するかかりつけ薬局として、また、地域医療における薬剤師の存在意義の確立として必要な対応であると考えられる。